

今金町立博物館（仮称）の展望

糸魚川淳二¹⁾

A View of the Imakane Museum

Junji ITOIGAWA¹⁾

key words : 今金町立博物館, 今金町, 博物館, ピリカ遺跡, ピリカカイギョウ.

Imakane Museum, Imakane Town, Museum, Pirika Site, Pirika Sirenia.

1. はじめに

1970年代に始まった博物館建設ラッシュは現在も続いている。丹青総合研究所の資料によると、新設館の数は1990年-268館, 1991年-258館, 1992年-309館, 1993年-371館となっている。北海道でみると, 1991年-28館, 1992年-17館, 1993年-27館である。一般的な傾向として, 自然史・美術館が増加している。

北海道瀬棚郡今金町は1980年以来博物館設立計画をもっており, 1989年から博物館建設構想委員会, さらに1993年より建設準備委員会が発足し, 1993年からは博物館建設準備室もスタートして, 博物館建設が推進されている。

1993年以来, 建設準備委員の一人として博物館建設に参画しているが, 研究紀要「今金地域研究」発刊の機会に, 博物館建設のこれまでを見, 全国的状况の中でこの博物館を位置づけ, 基本にそってこれからを展望してみたい。

発表の機会をあたえられた, 今金町教育委員会紀要編集委員会に感謝する。

2. 博物館の現在

まず最近における日本の博物館の現状をみてみたい。里見(1993)によれば, 1992年度で日本には5672館の博物館がある。多い方から, 人文系(60.1%), 美術館(16.4%), 動物園・水族館・植物園(7.7%), 理工系(7.2%), 自然史系(6.2%), 総合館(2.2%)となる。

地域的にみると, 北海道・関東・中部地方で多く, 四国・九州地方など西で少ない。北海道は博物館先進地で, 460館という数は全国一であり, 一館あたりの人口12268人は全国第10位であるが, 人口・館数でみたとき, 優れた数といえよう。

次に, 博物館の基本的な問題を呈示する。第1図(糸魚川, 1979 改定)に示したように, 3つの基本要素と4つの機能がある。「人」が「もの」に興味をもち, 「収集」する。その「もの」を「保

¹⁾ 名古屋大学名誉教授。Professor Emeritus of Nagoya University. 601, 5-7-15, Chiyoda, Naka, Nagoya City, 460 Japan.

存」し、それを調べ（「研究」），「展示」する。より理解しやすいように，「普及・教育」活動を行う。博物館に人びとがきて，「展示」を見，「普及・教育」活動に参加する。活動の場として用意されるのが「建物」である。こうしてみると，博物館は単純な構造をもったものであるといえる。

3つの基本要素のうち，「もの－資料」は博物館がつくられるとき，最初のきっかけになるものである。「もの」があつて初めて博物館は成立する。収集され，整理されて「もの」となった材料は保存され，研究されてさらに内容的に高められ，展示や普及・教育活動に利用される。「もの」は博物館の機能に深くかかわっているといえる。対象となる「もの」はその目的によって異なってくる。地域の材料はそのとっかかりであろうし，それがひろがって地球規模のものへと変わってゆくこともある。「もの」は博物館の財産であるから，それぞれの館が特色をだして，独自性をもったコレクションをもつことが望ましい。

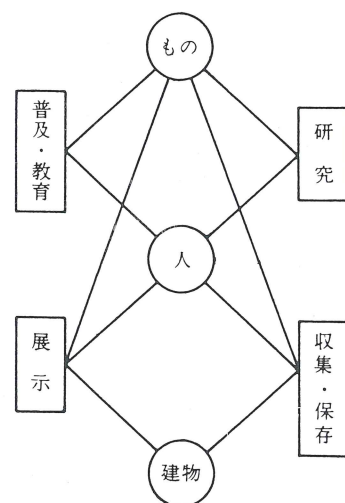
「人」は博物館にとって，もっとも重要な要素である。「人」が活動してこそ「もの」も「建物」も生かされることになる。次に述べる4つの機能も「人」の動きによって左右される。「人」のうち，柱となるのは学芸員で，博物館の多様な活動を支えている。それにもかかわらず，学芸員がいない，少ない，間に合わせであるなど，その質及び量がしばしば問題となる。基本的な理解が不足しているとしかいえない。学芸員に求められることは，学芸員資格の有無でなく，専門的な知識をもち，いろいろなことに柔軟に対応できる資質をもつことである。センスと熱意も欠くことのできない条件といえよう。

「建物」は博物館が機能を果たす場として重要である。十分な空間があり，使いやすければよい。4つの機能を十分に発揮出来るようなバランスのとれた配分が望ましい。来館者にとって気持ちよいスペースが用意されることが必要である。

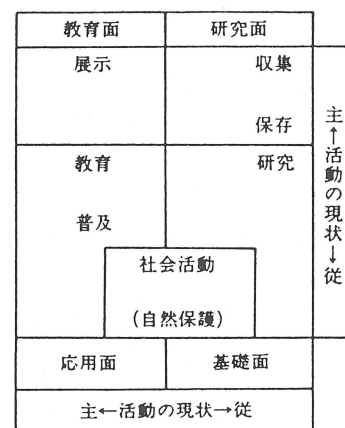
4つの機能は大きく2つの側面－研究面と教育面に分けられる（第2図；糸魚川，1990）。研究面は基礎となる面で，収集・保存と研究からなる。展示－教育・普及の教育面はどちらかという応用面である。活動の現状は第2図にも表現してあるが，教育の側面にウェイトがあり，研究面はなおざりにされていることが多い。館によっては，ほとんどされていない場合もある。研究面の活動は目立たないこと，直接博物館の活動のように見えないことにより，このように重視されていないことが多いが，教育面の活動を支える重要なものである。収集された「もの」資料は展示を内容のあるものにし，研究された結果は展示を面白くする。普及・教育活動についても同様である。

博物館における研究活動は糸魚川（1993，1994）にまとめられているが，主な項目は次のようなものである。

- 1) 「もの」を材料とした研究。
- 2) 地域に関する研究。
- 3) 博物館の他の活動－収集・保存，展示，普及・教育活動－の基礎となる研究。
- 4) 地域的な研究から始まって世界的・地球的規模のレベルまで発展する研究。



第1図 博物館の基本要素と機能（糸魚川，1979，改定）



第2図 博物館機能の2つの側面（糸魚川，1990）

- 5) 学芸員を中心に、また、博物館に関係する人たちによって行われる研究。
- 6) 研究の成果は館の研究報告、また、国内外の学会の出版物に公表されるべきである。
- 7) 博物館にはしかるべき研究報告が用意されねばならない。

教育面における活動は展示、教育・普及活動にわけることができる。

展示はつぎのようにまとめられる。

- 1) 展示は博物館の「顔」ともいえるものである。
- 2) 展示は「もの」の価値を呈示し、美によって感動を呼び起こし、解説することによって内容を理解させるものである。
- 3) よい材料によって構成され、わかりやすい解説によって説明されることが必要である。
- 4) ハード・ソフトの両面において、最新の技術・情報を組み入れ、多様な展示をつくりあげる必要がある。
- 5) 材料によっては、野外展示を導入することができる。

教育・普及活動には行事、特別展、出版物、友の会活動、情報サービスなどがある。

- 1) 行事：各種の教室、観察会、採集会、講演会、映画会などで、そのやり方はさまざまである。一般に定期的に継続しておこなわれている。最近では、体験型の行事が行われることが多くなった。
- 2) 特別展：学芸員が企画して、館の自主的な活動として行われるのが本来である。調査・研究の結果を特別展とし、その資料を保存し、さらにそれを常設展示に繰り入れるというパターンになるとよい。博物館相互の共同企画のもの、新聞社・イベント会社などからの持ち込み企画もある。
- 3) 出版物：館の独自のものが要求されるが、情報が氾濫している現在ではなかなかむづかしい。展示解説のような身近なものから始めて、地域の情報をもりこんだものをつくりたい。
- 4) 友の会活動：博物館と外の人びととを結ぶ役割りを果たすものとして大切である。いうなれば、博物館の応援団であり、時にはピンチヒッターの役を果たしてもらうこともある。次代養成のベースをつくるという意味でも重要である。
- 5) 情報サービス：博物館は情報の発信・受信の行われやすい場である。館と人びとの間だけでなく内外の博物館同士の発信・受信が行われる必要がある。

その他の活動について簡単にふれておく。

- 1) 社会活動：第2図にも示されているが、4つの機能とは別に、最近重要になってきた側面である。地域の活性化、自然保護など、博物館活動の対象となることは多い。
- 2) 運営：博物館は簡単な構造をもちながら、多様な機能をもつユニークな組織体である。行政の一般的な組織とは異なることが多い。これを運営するには共通するルールをベースとしながらそれぞれの館が独自性をもって行う他はない。i) ソフトな対応, ii) 小回りのきく運営, iii) 腰掛けでない職員の配置, iv) 労働強化にならない勤務体制の確立 などが重要であろう。
- 3) 博物館ネットワーク：博物館は行政の中ではユニークな存在であるが、同様な形態をもつものは各地にあるわけである。これらをリンクして活動すればその効果は大きい。資料、情報、研究、展示などの面での協力が望まれる。それにも増して、博物館同士、学芸員を初めとする構成員の連帯が大きな意味をもっている。

このようにみえてくると、博物館はシンプルな機構でありながら、複雑な活動をする場である。独自

性をもった社会教育施設であり、同時に学校教育にも役立っている。最近、生涯学習が盛んであるが、博物館は古くからの生涯学習施設であるといえよう。

3. 今金町の場合

今金町は北海道南部渡島半島にあり、太平洋側の山越郡長万部町国縫と日本海側の瀬棚郡瀬棚町の間であり、ほぼ東経 140°、北緯 42° 30′ に位置する。面積は約 570km²、世帯数約 2500 戸、人口 7700 人、就業者の 36% は農業に従事している（1990 年）。米、乳牛、豚などが主な生産物であり、じゃがいもは今金男爵として名高い。

今金町には本州に近い景観も見られるが、やはり北海道で、広大である。自然にめぐまれ、1000m レベルから数 100m クラスの山々に囲まれ、真ん中を後志利別川が流れる。北限に近いブナの森があり、温泉・スキー場がみられる。化石が出、地下資源（砂金・めのうなど）があり、石器が豊富に産出する。

計画中の今金町立博物館（仮称）に博物館の基本をみてみることにする。

「もの」は自然・人文の両面において豊富である。自然ではピリカ海牛を初め多くの化石を産し、瀬棚層の貝化石の模式産地は当町の中にある。砂金・めのうなども産する。植生は北限に近いブナ林を含む温帯林である。後志利別川はかつて日本一の清流に選ばれたほどきれいである。

人文の分野では美利河 1 遺跡を初め多くのサイトから出る石器はきわめてすぐれたもので、また、豊富である。ピリカ遺跡は国指定の史跡となっている。明治以前の資料は多くないが、明治時代にはいって開拓が始まると、農業を中心とした人びとの暮らしの資料がふえ、インマヌエル教会はキリスト教の北海道における初期伝道を示す貴重な材料である。

以上の点を考慮して、建設準備委員会はテーマとして、「石・ヒト・川」を選んだが、適切な選定であったといえよう。

「人」に関しては、1986 年より学芸員が採用された。人文・自然それぞれ 1 名の学芸員をもつことは、多くの場合遅れて準備されることが多い中で高く評価される。現実の問題として、博物館建設が学芸員を中心に進められていることは誰しも認めるところであろう。事務方はトップの理解のもと、学芸員と協力して作業を進めていて、これも博物館建設に欠かすことのできないことである。建設委員会は地域の、各階層から選ばれた方がたから成り、4 人の専門職の委員を含めてよいバランスをたもっている。熱心に議論がなされていて、効果をあげている。

つくられ方であるが、学芸員を中心として行政サイドが作業を進め、構想委（地域のメンバー）－建設委（地域＋専門）と進められてきた委員会がこれに関与した。展示業者はコンペで決められた。将来決定される建築業者との間の調整はそんなに難しいことではない。ここまでの作業は学芸員－事務方－委員会がうまく歯車があって進められているといえる。

立地は現地主義で選定され、建設予定地はピリカ遺跡の隣にある。ここは同時にピリカ海牛の産地の近くであり、また、砂金採掘地跡も近い。他の立地条件として、ピリカダム湖、クアプラザ（温泉）奥ピリカ温泉などに近く、今金町地内では外部からの人の出入りの多いところである。

博物館準備室はすでに活動を行なっていて、この論文の掲載されている研究紀要の発行もその一つである。博物館計画の基礎になった資料につづいて、継続して収集が行われ、石器・化石の復原作業もいくつか進められている。展示は学芸員主導で行われていて、委員会に相談されている。普及活動も地域の研究グループと協力して行なわれている。このグループは収集・研究にも深く関わっていて、博物館建設にとって欠かせない役割を果たしている。

4. 博物館のこれから

すでに述べたように、多数の、そして多様な博物館が存在する。レジャー施設も含めて、どこへ出かけるか、人びとの選択は自由であり、また、そのような選択が行われている。入館者数だけが博物館を評価する基準ではないが、やはり、多くの人に見てもらふことが必要である。自ずと競争が激しくなるはずである。博物館はその原点をおさえて、その機能を発揮することを考えねばならない。

これからの活動のポイントとなる点を博物館一般についてあげてみる。

- 1) 受け身でなくて積極的に活動する。
- 2) 分化の時代であり、そしてそれを総合する時代がきている。
- 3) 人と「もの」の充実をはかる。
- 4) 人と「もの」について、他館、他機関との交流をはかる。
- 5) 参加・体験型の活動をする。
- 6) 分かりやすい展示を構成する。
- 7) 情報システムの充実をはかる。
- 8) 個人コレクションを公的なものへ転化するようにする。
- 9) 遊びの要素をそなえる。
- 10) ミュージアムショップを充実し、内容を高める。

今金町の場合はどうであろうか。「もの」に恵まれ、これまでよい対応がされてきたが、これから先、次のような点に配慮が必要であろう。

- 1) 積極さをこれまで以上に発揮する。
- 2) 自然部門と人文部門の融合をはかる。
- 3) 人と「もの」の充実をはかる。
- 4) 他の博物館・大学などの機関との交流をはかる。道内・国内・世界とネットワークをつくる。
- 5) 展示をわかりやすく、内容のあるものとする。遺跡のガイダンス施設との調和をはかる。
- 6) 体験施設—石器づくり、化石採集、砂金とりなど—をつくる。
- 7) 情報センターとなるよう努力する。
- 8) 遊びの要素もそなえ、町民に憩いの場を提供する。地域の材料を使ってミュージアムショップを充実する。
- 9) 地域との結びつきを深め、町の文化・学術の中心とする。
- 10) 将来、いわゆるエコミュージアム（丹青研編、1993）への発展ができないか検討する。
- 11) 北海道のこの位置にあること、冬の雪の条件を逆手にとって、世界を目指した博物館づくりをする。

これからのつくるプロセスにおいて、準備室側（学芸員＋事務方）と業者側とうまく調和した活動をする、建築と展示を整合させることも必要である。建設委員会は適時その内容をチェックし、示唆を与えることとなる。

つくった後の運営に関して、「博物館は活きている」の言葉どおり、積極的な、そして充実した活動をして欲しいものである。その展望は開けているから、大きな期待をもって見まもっていきたい。

文献

糸魚川淳二、1979、博物館だより。共立出版。220 p.

- 糸魚川淳二, 1990, 地学系自然史博物館の理想と現実. 地学ニュース, no.431, 7-10.
- 糸魚川淳二, 1993, 日本の自然史博物館. 東大出版会. 228 p.
- 糸魚川淳二, 1994, 自然史博物館の現在. 豊橋市自然史博物館研報, no.4, 29-41.
- 里見親幸, 1993, 博物館に新しい流れ. アエラ, no.5, 42-43.
- 丹青総合研究所 (編), 1993, エコミュージアム. 丹青総研. 138 p.